

4. 今治捺染工業協同組合について

結成時の初期メンバーとして活躍

日本ではタオルは分業によってつくられているが、今治ではおもな工程ごとに同業者団体が結成されている。たとえば、準備・仕上工程を担う染晒加工業には愛媛県繊維染色工業組合があり、製織工程には今治タオル工業組合がある。そして、捺染加工業には今治捺染工業協同組合がある。

表 1 今治における捺染加工業をめぐる時代背景と
今治捺染工業協同組合の沿革

年	内容
昭和20年代	浴巾タオルの緯糸にナフトール下漬処理したものを織り込み、その上にナフトール顕色剤を捺染して緯糸を発色させた「おぼろタオル」を生産。
昭和30年代	合成染料・顔料を使って捺染したプリントタオルが生産されるようになったが、当時はまだ手捺染。
1957	今治では京都の友禅技術をタオルに応用し、顔料捺染を開始。
1962	全国で初めて今治にてタオルに合成染料（染料捺染）を使用。
1963	オートスクリーン捺染機第一号が（株）伊予捺染で稼働。
1967	今治捺染工業協同組合設立。設立時の組合員数は22社。組合創設の背景に、捺染機の機械化（自動スクリーン捺染機の導入）による生産性の向上と省力化があり、またタオルの約半数がプリントタオルになり、捺染業が急成長したことがある。
1974	手捺染から機械化へ急速に移行。この背景に人件費の向上と労働力不足、タオルケットの流行がある。捺染業者も増加。
1980	組合員の95%の工場オートスクリーン捺染機および半自動捺染機械を設置。
昭和60年頃	シャーリングタオルの減退、単糸ロングパイルの台頭により捺染需要が減少。
1990	この頃より中国製品が流入。平成に入り色数が8色程度だったが12色の多色刷りが増える。綿毛布の捺染加工を開始。
1991	捺染加工のピーク。これ以降は低迷。
1998	綿糸の使用量がピーク時に比べ、60%低下。
2000	廃業が増加。タオルの輸入規制を求めるセーフガード発動要請。

出典：今治捺染工業協同組合提供資料「組合の設立」（1998年）および「捺染業界ビジョン調査事業報告書」（1985年）より作成。

大見博記氏は、今治捺染工業協同組合創設時のメンバーである。クラウン樹脂化工は、主として染料・染物材料の卸・製造、販売を

おこなっているが、捺染加工業者の仲間として同業者団体の創設に力を貸してきた。

表1は、今治における捺染加工業をめぐる時代背景と今治捺染工業協同組合の沿革をまとめたものである。昭和20年代に今治では、浴巾タオルの緯糸にナフトール下漬処理したものを織り込み、その上にナフトール顕色剤を捺染して緯糸を発色させた「おぼろタオル」が生産されるようになった。昭和30年代になると、合成染料や顔料を使って捺染したプリントタオルが生産されはじめたが、当時はまだ手捺染であった。そして、1957年に京都の友禅技術をタオルに応用し、顔料捺染が開始された。

1960年代の高度成長期になると、全国的に合成・化学染料が普及し始める。1962年、ちょうど大見氏が今治に営業にやってきた頃、全国で初めて今治で合成染料を使ったタオルがつくられた。翌年の1963年には、オートスクリーン捺染機第一号が伊予捺染で稼働し、その後他社でも徐々に手捺染に代わって普及した。また、タオル需要の増大は、捺染加工のニーズをより一層高め、事業者の数も増えた。

満を持して、1967年に今治捺染工業協同組合が組合員数22社によって設立された。組合創設の背景には、捺染機の機械化（自動スクリーン捺染機の導入）による生産性の向上と省力化があり、またタオルの約半数がプリントタオルになっていき、捺染加工業が急成長していったことがある。

1970年代に入ると、日本は石油危機を経験し経済成長にストップがかかったが、「減量経営」へシフトする契機となり、その結果省エネ型技術が構築された。今治では、おもに人件費の削減と労働不足の解消を理由に、手捺染から機械化へと急速に移行していった。さらに、タオルケットの大ブームが今治タオル業界の成長に一役買い、捺染加工業者の数は50社を超えた。表2は組合員数・従業員数・捺染機械台数・総加工金額の推移である。これによると、2回目の石油危機の際には組合員数は58社を数え、それ以降も増加し、

この傾向は 1993 年までつづく。

表 2 組合員数・従業員数・捺染機械台数・総加工金額の推移

年	組合員数	従業員数	捺染機械台数	総加工金額（億円）
1975	54	670	16	34
1976	56	700	28	37
1977	55	725	41	41
1978	56	741	62	46
1979	58	757	88	53
1980	59	802	90	60
1981	59	800	100	70
1982	58	790	100	80
1983	60	883	108	88
1984	60	887	119	79
1985	57	832	123	65
1986	56	762	116	65
1987	55	767	114	67
1988	54	800	109	72
1989	67	968	125	84
1990	70	1,071	134	97
1991	70	1,151	113	100
1992	71	1,234	133	95
1993	70	1,223	131	90
1994	67	1,197	129	80
1995	64	1,167	121	68
1996	63	1,145	118	57
1997	57	1,020	109	53
1998	55	948	104	48
1999	52	923	101	44
2000	46	850	91	37-38
2001	38	726	77	34
2002	32	372	53	30
2003	28	311	49	25
2004	25	300	43	20
2005	22	278	38	18
2006	21	275	34	17
2007	18	245	33	15
2008	18	245	32	15
2009	18	245	32	15
2010	-	-	-	-
2011	-	-	-	-
2012	-	-	-	-
2013	-	-	-	-
2014	17	216	22	15
2018	14	-	-	-
2021	14	-	-	-

注：総加工金額は億以下四捨五入。

出典：今治捺染工業協同組合提供資料「組合員数・従業員数・捺染機械台数・総加工金額の推移」および「今治捺染工業協同組合 設立50周年記念」（2018年）より作成。

1980年、組合員の95%の工場オートスクリーン捺染機および半自動捺染機械が設置され、量産体制が確立する。しかし、バブル

経済期の頃から、シャーリングタオルの人気の下落する一方で、単糸ロングパイルが台頭し、捺染加工の需要が減少した。そして、バブル経済崩壊後、日本は「失われた 20 年」に突入し、タオル業界でも深刻な影響を受けた。

その主な要因が中国製品の流入であった。表 2 で見るように、捺染加工のピークは 1991 年から 1993 年であり、これ以降は低迷の一途を辿る。減退のスピードは速く、1998 年に綿糸の使用量がピーク時に比べて 60% も少なくなり、2000 年には廃業する者が増加した。こうして、タオルの輸入規制を求めるセーフガードの発動要請が、タオル業界を挙げておこなわれた。

現在の組合員数は「型」製造などの周辺関連企業も入れて 14 社である。ピーク時には非組合員を含めると 80 社を超えていた。これ以上の縮小は、今治のタオル産地自体の存続を脅かす。後継者不足問題やタオル需要の減少、他国との競争激化などタオル産地が抱える問題は深刻だが、産地維持のためにクラウン樹脂化工の役割はこれからも大きい。

5. 若者へのメッセージ

自分より相手、他者のことを考える余裕を

昭和 10 年生まれの大見氏は、義理人情の厚い時代の人である。戦争を経験し、貧しかった日本を知っている。戦後の日本は、ゼロからの復興を余儀なくされ、多くの人が生きていくのに必死で自分のことだけで精一杯だったはずだが、貧しいながらも助け合い、戦後復興期、高度成長期、安定成長期をとおして見事に復興を遂げた。そして、アメリカを凌ぐ経済大国になった。昭和の時代、多くの人必死で働いてきた成果である。大見氏もその「多くの人」のひとりであり、商売でも遊びでも人と交わるときは相手、他者のことを

優先的に考えるように努めてきた。

しかし、「最近では個人の利益を優先に考える人が多く、相手のことをおもう余裕がないように感じる」と大見氏は言う。いつの時代も若者に対して物足りなさを感じるものだが、1990年代以降の情報技術の進展によってコミュニケーションの方法が変化するなかで、「個人化」が進んだのは間違いないだろう。

コロナ禍でイベントが中止になり、タオル需要は後退した。タオル生産に関わるすべての業界は等しく打撃を受けた。だが、どんな状況に遭遇しても、モノづくりの本質は変わらない。いいタオルづくりの根底には、他者を思いやる気持ちがつねにある。

6. おすすめの本

本でも映画でも純愛ものはいいですね

大見氏は、若い頃から読書や映画鑑賞、テレビ鑑賞が好きである。印象に残っている本は、純愛小説の『野菊の墓』（伊藤左千夫、新潮社、1981年）や歴史小説の『三国志』第1～10巻（吉川英治、六興出版、1956～1957年）である。『三国志』では、「登場する人物全部好きやったね。孔明もそうだし、玄德もそうだし、あと二人の部下もいいしね。」

大見氏は推理小説も好んで読んでおり、コナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」シリーズや江戸川乱歩の「明智小五郎」シリーズは読破している。

映画では、「君の名は」（脚本・菊田一夫、監督・大庭秀雄、配給・松竹、1953年公開）がお気に入りであり、「やっぱり純愛ものはいいですね」と大見氏。最近ではテレビ鑑賞も日課である。こちらはもっぱらミステリーが多く、「相棒」（制作・テレビ朝日系列）や「内田康夫サスペンス 浅見光彦シリーズ」（原作・内田康夫、制作・TBS

系列およびフジテレビ系列）が好みに合う。

本や映画ではないが、大見氏の「おススメ」で外せないのは「山」である。大見氏は、北アルプスの山々のほとんどを完登したほど、大の山好きである。たくさんの山に登った大見氏が、生涯でもっとも感動したのは上高地の風景である。今までに10回以上は登った。

上高地は、北アルプスのほぼ中央に位置し、標高1,500mの山岳リゾートである。「風景の財産」とも称され、その圧倒的な自然美は誰をも感動させる。本や映画を鑑賞するのもいいが、大見氏にとって山は格別な存在である。山あり川あり池あり、河童橋あり。「ぜひ上高地に行ってみてください」と目を輝かせる大見氏であった。（完）



イラスト協力：

城西大学経営学部辻ゼミ生

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

北村寛彬・野崎稔『農林水産省における蚕糸試験研究の歴史』独立行政法人農業生物資源研究所、2004年。

信州大学ホームページ（<https://www.shinshu-u.ac.jp/>）。

帝国興信所編『帝国銀行会社要録』第47版、帝国興信所、1966年。

編集後記

日本のタオル工業の歴史について研究している最中ですが、まだまだ奥は深いです。今治捺染工業協同組合の創設は1967年ですが、管見のかぎり同組合に関する資料があまり残っておらず、このたび「タオルびと」制作プロジェクトの委員に協力をしてもらい、伊予捺染の阿部^{ひでじろう}秀二郎さんを紹介してもらいました。阿部さんは同組合の理事長です。阿部さんから捺染加工業について話をお聞きし、その流れで「大見さんなら組合のことをよく知っているだろう」と、すぐに大見さんを紹介してもらいました。

そして、同組合の事務所に移動し、大見さんと対面しました。なんとも穏やかな笑みを浮かべる、チャーミングな大見さんに一目惚れ。同組合の初期メンバーと聞いて、これは大見さんの歩んできた人生をお聞きしなければと思いました。対面したばかりの大見さんに、不躰ながら「タオルびと」のことをお話しし、インタビューを快諾していただきました。

1ヶ月後、クラウン樹脂化工の本社で再会。「捺染加工について話をする前に2つの現場をぜひ見てほしい」とのことので、伊予捺染と愛光プリントの工場に大見さんの愛車「クラウン」に乗せてもらい、工場見学しました。2社の工場に設置してある捺染機はまったくの別物で、工場の雰囲気もまるで違っていました。いずれの工場も従業員がテキパキと手際よく作業をしていますが、東京の街にたとえるなら、伊予捺染が若者の集う渋谷、愛光プリントは寅さんを生んだ葛飾です。

2つの工場を見学させてもらった甲斐があり、大見さんの専門的な話も理解できました。工場見学を合わせるとおよそ2時間半のインタビューになりましたが、まだお聞きしたいことがたくさんあり、インタビューの最後に3度目の再会の約束をしました。われわれの再会は「君の名は」とは違い、行き違いはありません。大見さんとの約束を忘れないように、ここに記します。「パイプのけむり」で再会し、店自慢の手作りケーキを食べましょう！

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の35人目は、壺内タオル（株）代表の壺内卓氏である。今治系友会のメンバーでタオルの原料となる糸を卸している。その一方で、環

境問題を意識した自社ブランドを立ち上げてタオル製造もおこなう。今治糸友会メンバーから初めての「タオルびと」登場となる壺内氏にタオル道について話をうかがう。

